

でっぱりざかじょう  
出張坂城跡 (第2次)

遺跡番号 203-019  
調査回数 第2次  
所在地 山形県鶴岡市下清水字水尻  
北緯・東経 38度43分16秒・139度46分00秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所  
起因事業 国道7号鶴岡バイパス  
調査面積 600㎡  
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日  
現地調査 平成23年5月9日～6月17日  
調査担当者 福岡和彦(現場責任者)・佐藤智幸  
調査協力 鶴岡市教育委員会・庄内教育事務所  
遺跡種別 城館跡  
時代 中世  
遺構 掘立柱建物跡・集石遺構・溝跡・柱穴  
遺物 中世陶器・近世陶磁器・近現代陶磁器・銭貨・近現代鉄製品 (文化財認定箱数:10箱)



図1 遺跡位置図 (1:50,000)

### 調査の概要

出張坂城跡は、鶴岡市役所から西へ約5km、大山川と湯尻川に挟まれた標高30～50mの丘陵上に築かれた平山城で、近接する山城の栗館とともに別名を「妙味水城」「清水城」とも称された。現在、本遺跡の大部分が鶴岡鉄工団地として造成されており、周辺には水田や特産品の「だだちゃ豆」の畑が一面に広がっている。

出張坂城の築城者や築城年代については不明であるが、古文書等の史料により武藤(大宝寺)氏の属城だったことが明らかになっており、全国各地で戦国武将が勢



写真1 調査区全景(東から)

力争いを繰り返していた戦乱の世の16世紀中葉～後半には、本遺跡についても、庄内の地を巡る武藤氏と最上氏の戦いの舞台となっていた。武藤氏は、天正15(1587)年、最上氏と内通していた酒田の東禅寺城(亀ヶ崎城)城主、東禅寺筑前守(前森蔵人)らの反乱により自害へと追い込まれ、歴史の表舞台から消え去った。そして同年、出張坂城(清水城)は最上義光の子である清水義親(大蔵)らによって落城した。

すでに本遺跡の大部分は、昭和33(1958)年の国道7号開削及び昭和44(1969)年の鶴岡鉄工団地の造成

により大幅な削平を受けていたが、今回、国道7号鶴岡バイパスの4車線化工事によりさらに遺跡が削平されることから、現存する部分のうち、工事範囲に係る600㎡を対象に発掘調査を行った。なお、昨年度は、今年度実施した本調査のための地形測量調査や立木の伐採・搬出作業を行っている。

調査は、テラス状の地形4か所を調査区として設定し、それぞれA～D区と呼称した。また、土層の堆積状況確認や遺構検出のためのトレンチを丘陵の尾根上及び丘陵を縦断する部分に2か所設定し、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチと呼称した。

### 遺構と遺物

遺構は、B区から掘立柱建物跡1棟、集石遺構1基、溝跡1条、柱穴を検出した。A区からは平場の下段から幅約1mの犬走り<sup>かすがいのみ</sup>と想定される遺構を検出した。C・D区については全体的に削平を受けており、検出遺構は皆無である。

掘立柱建物跡(図2)は、2間×2間、梁行は1間である。大きさは、桁行が約3.5m、梁行が約1.4mを測る。柱穴の一つから17～18世紀代の唐津産の陶器片が出土したことから、建物の年代もおおむね同時期と考えられる。

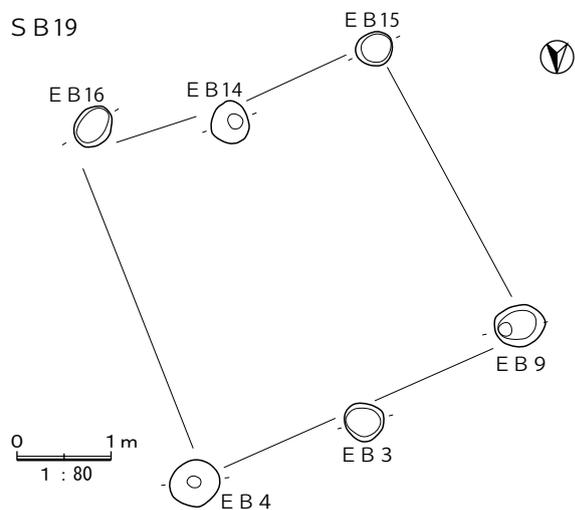


図2 掘立柱建物跡

集石遺構(写真2)は、南北を底辺、西を頂点とする、三辺が約90cmの正三角形の遺構で、すべて川原石が用いられている。人為的な配石をされているものの、断面を観察した結果、地中に掘り込まれた痕跡はなく、遺物の出土もなかった。遺構が形成された時期及び性格については不明である。



写真2 集石遺構(東から)

溝跡(写真3)は、長さ約3m、幅約60cm、深さ約40cmを呈する。炭化物や焼土を多く含み、大量の釘、和釘、<sup>かすがいのみ</sup>鏝・鑿等の建築具、炭化した木材、石材、陶磁器片、寛永通宝や用途不明の鉄製品等が出土した。なお、出土した炭化物3点の年代測定を行ったところ、18～19世紀代との測定結果が得られた。



写真3 溝跡(北から)

その他、遺物として、遺構外から中世陶器、近世陶磁器、近現代陶磁器、瓦質土器、縄文土器等が出土したが、いずれも小破片で、器形が復元できるものは少ない。

### まとめ

今回の調査区は城郭の端部であり、築城時期の遺構・遺物は極めて少数だったが、近接地で民俗行事の「モリ供養」の習俗が行われ、また、遺跡周辺は古くから「稲荷坂」と呼ばれ遺跡内に稲荷社が建立されるなど、古くから信仰の場となっており、近現代においても人々の営みにとって重要な場所だったことが明らかになった。